

会長就任に際して

岡 部 三 郎*

今日もなお私の記憶に新しいことは、大正3年私が東京帝大2年生の時、鉄道会館における土木学会の創立総会に学生員として出席し、初代会長 古市博士の立派な白いカイゼル髭の風貌に接した思い出であります。

以来、五十年今日まで活発な活動により、わが国最大の学会の一つとして逞しい発展を遂げられたことは、誠におめでたいことであります。

今般、はからずも土木学会の会長にご推挙されましたが、多年民間におりました私としては夢想だにできなかったので、まるでカッパが丘に上ったように戸惑っている次第でございます。

前期は、福田会長によって、五十周年記念事業や土木図書館の建設等沢山の業績を挙げられた後だけに、私の会長ではまことに見劣りすることとは存じますが、ご引受けした以上、驚馬に鞭打って、役員ならびに会員各位のご鞭撻とご協力によって、会長の職責を全うしたいと念願する次第であります。

本学会の会長として強いて抱負を述べれば、

第一は、学会の若い会員から、純土木工学的な問題を探究せる多数の論文の提出を望むものであります。

第二に、一般会員に対しては、公務員たると民間人たるとを問わず、セクショナリズムや政治的の我田引水に左右されない、真に国の利益を中心とする、経済に立脚した国土の改造に関する優秀な計画や報告の提出を希望するもので、これらが将来日本をして世界の持てる国に発展せしむる根源となることを念願するものであります。

私のいう国土改造とは、日本の経済発展の基盤を確立する土木事業で、たとえば、信号のないノンストップで走れる長距離道路網の建設（都市高速道路および海峡横断橋梁、トンネルを含む）、広軌幹線鉄道の増設、港湾の拡張および臨海工業地帯の造成、治水および利水事業の徹底、上下水道の完備、干拓事業の拡大、水力、潮力、揚水（海水を含む）、発電の開発等であります。

いずれにしても、大工事を実現するにはばく大な資金を要するのでいかに立派な計画でも、資金問題の裏付けのないものは、なんらの価値のないことを銘記すべきであります。

今日、さかんに事業の経済効果という言葉が流行していますが、経済効果と称する内にも、有料道路、鉄道、埋立や電気事業のようにただちに収益を挙げ得るものと、河川改修、一般道路や港湾等のように直接の収益はなくとも、将来の日本の発展に寄与し間接の経済効果のあるものとの二種類あります。

第一種の収益をとまなう事業でも、国の発展に寄与するものに対しては、当初の建設費に対し国は融資の斡旋をする必要があります。

第二種の収益のない事業に対しては、国および関係地方公共団体が従来事業費を予算に計上されて来ましたが、年度予算には限度があつて十分な建設を望むことは不可能であります。大規模な公共事業は国土開発の基礎施設を造成するものであり、将来の国民経済発展の根源をなすものでありますから、これらに要する費用は現在の国民負担による税金のみによって賄うべきものでなく、その受益者たる子々孫々に分担させるべき性質のものであります。

したがって、かかる公共事業費は、大部分国債発行によって支弁するのが妥当であると思います。ただし、インフレーションを発生しない方途を講ずることが必要なは申すまでもありません。

かくして、従来これらに用いた国費を他の一般の公共事業費に充当することができるので、地方公共団体に重圧を与えている負担を軽減し、理想的な国土の改造が可能となり、名実ともに日本が世界の持てる国となることは不可能ではないと信ずるものであります。

以上を集約すれば、土木学会においては土木工学の理論と探究するとともに国家の利益を基幹とする経済に立脚した国土改造を推進されんことを提唱するものであります。

私も現に国土改造の一部門たる臨海工業地帯造成に日夜心血をそそいでいる次第であります。

* 第53代会長 東亜港湾工業KK社長

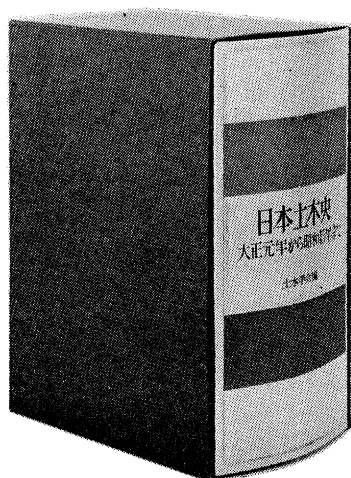
土木学会創立50周年記念出版

日本土木史

——大正元年～昭和15年——

土木学会編

予約募集



「明治以前 日本土木史」が土木学会より刊行されてから 30 年…。この間わが国は第二次世界大戦の苦い経験を経て廃虚の中から関門トンネル、若戸大橋、黒四ダム、東海道新幹線、高速道路等……世界に誇る大土木工事を完成してきた。しかし、これらの大工事はただ単に現在の土木技術だけの力で完成したのではなく、新丹那トンネルがいちはやく貫通できたのは昭和8年に貫通した旧丹那トンネルの貴重な経験があるからであり、戦後の目ざましい復興には関東大震災後の都市計画が貴重な教訓であった。

このように過去は現在の、現在はよりよい未来への一つの歴史過程である。現在編集をすすめている「日本土木史は」、大正元年の木曾三川分流工事竣工から大正12年関東大震災、昭和8年丹那トンネルの貫通、9年京橋～新橋間地下鉄の開通、13年塚原ダム完成、15年のわが国最大の開閉橋勝鬨橋竣工までの約30年間の土木のあらゆる部門にわたる土木技術、土木事業の苦難にみちた、世界に誇る輝やかな歩みを余すところなくとらえた大宝典である。

この間は第一次世界大戦から第二次世界大戦への序曲であり、軍事土木という言葉が生れ、陸軍・海軍・防空・飛行場等に土木技術が盛んに利用され、また、わが国は満州・朝鮮・台湾・樺太・華北等においても盛んに道路・鉄道・水道・ダム等の土木工事をこなしていた。本書ではこれら海外における工事を貴重な資料を用いて説明しているのをはじめ、国内において多くの土木技術者に親しまれているコンクリート示方書の歴史を語り、水理学、応用力学、土性および土質力学、測量、土木材料等の基礎学問の研究過程、また、土木教育史、学・協会史等も取り入れてあるので図書館へぜひお備え下さい。

なお、本書は創立50周年記念の限定出版につき購入希望者を募り、残部が生じた場合のみ一般に頒布しますので、ご希望の方は次ページの申込書によりご注文下さい。

体 裁：B5判・8冊

横一段 1200頁
箱入上製

定 価：10 000円

申込締切：7月末

特 価：8 000円
(7月末申込に限る)

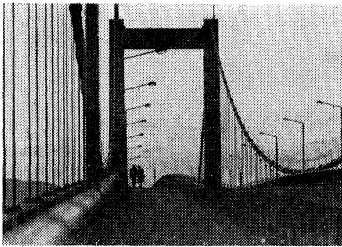
特価頒布は
前金予約に限る

◀申込先▶ 土木学会 ◀東京都新宿区四谷一丁目・振替東京16828番▶

昭和39年度土木学会賞受賞

若戸橋工事・調査報告書

ご希望の方へ



体裁：B 5 判 調査報告書 920 ページ

工事報告書 1248 ページ

定価：30 000 円（送料共）

申込先：◀土木学会▶東京都新宿区四谷1丁目

◀最近の若戸大橋

東洋一の規模を誇る大吊橋「若戸橋」は、わが国の橋梁技術と国産資材を結集して、昭和 37 年 9 月完成した。若戸と戸畑を結ぶ連絡道路は昭和のはじめから大きな夢として描かれ、昭和 12 年国防上の要請から、まずトンネル案が研究され、昭和 13 年には、当時の内務省下関土木出張所によって現地の調査が行なわれ施工認可となったが、第二次大戦の激化にともない、工事着工に至らず中止のやむなきに至った。そして昭和 27 年「道路整備特別法措置法」の制定により、有料橋の構想のもとに福岡県により調査がすすめられたが、昭和 30 年 10 月建設省直轄調査が決定し、九州地方建設局により本格的調査が開始された。当時としては支間 300~400 m の吊橋はアメリカを除いて最大級の規模であり、わが国橋梁界では経験皆無であったので橋梁の設計、使用材料の検討、架設工法の研究等、諸外国の文献による資料収集より始められた。またそれぞれ人口約 100 000 人を数える若松・戸畑の両市街部に取付橋梁を必要とし、年間出入船舶 70 000 隻を数え、最大 10 000 t 級貨物船の航路を有する特定重要港湾上の架橋であるため、地形、地質、路線の選定、桁下高、橋脚の位置決定等に関係者一同なみなならぬ苦労があった。昭和 31 年 4 月、日本道路公団の設立と同時に、調査は建設省から公団に引きつがれ 32 年度一杯まで地形測量、ボーリング地質調査、経済調査、港湾調査、吊橋の静的模型試験、風洞試験、耐震試験、鋼材鋼索試験、アンカーブロック光弾性試験等が行なわれ、つづいて基礎大型ケーソン施工、吊橋主塔の架設、ケーブル用ロープの製作と架設等がすすめられ 37 年 9 月ついに洞海湾に深紅の大吊橋が完成した。

今回土木学会賞を受賞した「若戸橋工事・調査報告書」はこれらの調査の段階から完成までのすべてをとらえた報告書でありその内容は本誌受賞論文要旨（42~44 ページ）のとおりでありますので、ご希望の方は土木学会へお申込み下さい。

.....(きりとり線).....

若戸橋報告書
日本土木史

を前金で予約いたします。

No. _____

申
込
書

なお、代金 30000 円は 月 日 {現金書留} で送金する。
8000 {振替}

注：必要な箇所に○印をつけ下さい。

住所：

氏名：

電話：

Ⓜ

通信欄：